

梅光学院大学博物館

小さな心地よい空間

梅光学院大学の博物館は、入口に立つと展示室を一望できる小規模な博物館です。片隅にある2人掛けのソファから考古遺物や明治期の書画、戦前の生活用具等の展示資料を見渡すことができます。学芸員の方の展示説明は、訪れた人との会話から自然に始まります。室内は外部の光源を絶ち、音楽もありません。ここは、来館者が時間の経過を忘れ、資料と向き合える静かな空間なのです。

博物館実習を受講した私は、この7月から、受託資料「藤山一雄文献等資料群」の整理作業に参加しています。藤山先生は、1921～26年の間、本学院の前身である下関梅光女学院の地理科教諭として教壇に立たれました。その後、南満洲鉄道の子会社に入社して大連に渡られました。1939年には縁あって満洲国国立中央博物館副館長に就任。翌1940年、著書「新博物館態勢」で、博物館活動とは、管理を主体とする「体制」ではなく、研究機能と教育機能を兼ね備えたサービス機関に徹する「態勢」であるべきだと主張されました。これは当時としては画期的な博物館論で、我が国の博物館史上に今も名を残す先生です。整理対象の資料群は著書や生原稿を始め900点余に及び、私はその資料調査の



館内の学院史のコーナーです。
左端の絵は、藤山先生が描かれた初代・
第3代院長廣津藤吉先生の肖像です。

作成をしています。

私にとって特に印象深い資料は、終戦後、26歳で夭折した先生の長女玲子さんの追悼録「白き躑躅」（1951年）です。これは玲子さんの友人等が寄せた惜別の歌や句、散文等を先生がまとめられたガリ刷和綴の小冊子です。玲子さんが歩んだ時間と、玲子さんを知る人たちの想いが読み取れて、手にするとその重みを強く感じることができます。

博物館とは、資料の保存・管理の場所だけではなく、人と物が時代を超えて出会える最良の空間です。その心地良さは、藤山先生が残された博物館活動の「態勢」を受け継ごうと努力する、小さな梅光の博物館の大きな魅力であると思います。

文=松田通子（梅光学院大学4年）



玲子さんの追悼録「白き躑躅」の表紙です。玲子さんは、1945年1月に上西健二郎氏と結婚され、同年10月に長女陽子さんが誕生。1949年4月に心臓麻痺で急死されました。